

文学博士林 巳奈夫君の『殷周時代青銅器の研究』

—殷周青銅器綜覽一—』に対する授賞審査要旨

殷周時代は中国が世界に誇るすぐれた青銅器の鑄造が行われた時代で、その遺品も多く、これらに対する学者の関心は中国はもちろん、日本及び欧米においてもきわめて高く、世界の考古学関係者のあいだで盛んな研究が行われてきた。著者は浜田耕作、梅原末治、水野清一ら諸氏の研究のあとを受け、早くからこの方面の研究に志し、多年にわたって充実した研究業績を挙げてきた。今回青銅器の中、特に重要な礼器（祭祀並に饗宴用）について綜括したのが本書であり、豊富な実物資料を搜羅し、周到な研究を行っている。

本書は本文編とそれに附された図版編の二冊から成る。本文編はこれを二編に分ち、まず第一編を総論とし、第一章前言につき、第二章発見・蒐集・研究史、第三章器種の命名、第四章礼器の類別と用法に分ける。第二章は宋代にはじまる殷周の青銅器の研究が近年にはいつて中国・日本及び欧米の学者によってどのように発展したかを克明に列挙するとともに、その一、一について適切な批判を下しており、すぐれた研究史にまとめている。これは同時に著者の研究に対する基礎ともなっており、本書の特色の一つである。第三章は第一編の中核を成す研究である。器種の名称は銘文によって知り得るものもあるが、宋代以降の学者によって命名されたものも少なくなく、その可否を検討することなく伝統的に踏襲されてきたものが多い。著者は器種をその用途によって食器・酒器・盥器・樂器及び雜器

の五種に分け、さらにそれらを六〇種以上に細分し、その各々につき、器種の名称を『周礼』などの古文獻の精細な解説を通じて明らかにしている。考古学資料とあわせて文献を重視する著者の研究によって多くの新しい見解が提出されている。こうした基礎的な研究から出発して、これらの青銅器が祭祀や賓客の接待に使用されたことを解明するとともに、またこれらの青銅器が使用された状況を青銅器に鑄造された図像と比較し、使用状態を確めている。また特に酒器について一節を設け、香草酒、醴、普通の酒、さらに温酒について、それぞれ特殊な容器が使用されたことを立証している。もちろんこれらの青銅器は貴人の墓から発掘されたものであるが、埋葬された青銅器は殷から周にかけての埋葬儀礼の変遷につれて変化することを立証しており、著者の新しい見解といえる。

第二編では殷・西周（周の前期）青銅器の実物資料を中心とした論述に移り、三章に分けて器形・紋様・銘文の時代的変遷の研究を行っている。まず殷と西周との青銅器を区別することが重大な問題であるが、従来は青銅器に鑄造された銘文の形式・内容による区別が行われてきた。しかし新中国の誕生以来、近代的考古学の方法によって発掘された青銅器はきわめて豊富となり、時代を確実に推定できる資料も少なくない。こうした資料を軸として著者はまず青銅器の器形によって編年を行った。この方法は従来土器の編年に使用されたが、著者がこれを青銅器に適用したのは全く新しい試みといえる。これまで不明確であった殷の年代について、主として『竹書紀年』を根拠にし、殷の滅亡を前一〇二七年とし、安陽遷都を前一三〇〇年ごろとしたのは、妥当な見解であるといえよう。ほぼ五〇〇年続いた殷代を前中後の三期に分ち、青銅器がはじめて出現する中期に対し、遷都以後の後期をⅠⅡⅢに細分する。西周の時代二五七年をやはり三期に分ける。こうした時代区分に対して、二六種の青銅器について器形が時代的に如何に変

遷したかを実物図版と対照させながら精細に叙述したのが第一章であり、今後この研究を指針として年代未確定な青銅器の編年が行い得るようになったのは大きな成果である。

第二章は第一章を受け、青銅器の紋様が時代的にどのように変遷したかを、四五種の代表的な紋様を目安にして分類詳論したものである。つづく第三章はやはり第一章の成果をふまえ、銘文の時代の変遷を論じたものである。まず銘文の書体についてその変遷を述べ、次に常用語句や文章の形式がどのように変遷したかを論じている。これまで父・祖の名を記すばあい、それに十干の一つを添えて父甲の如く表記することを以て殷代青銅器の特徴と考えられたが、著者の研究によれば西周時代にはいってもそうした記載があり、従来銘文に頼って編年を行うことの誤りを指摘した。

以上のような研究に本づき、長年にわたって蒐集した写真資料を整理したのが別冊の図版編である。ここには先学の著書論文はもとより、自らの手で搜羅した写真資料が実に三、五四一点集録されており、これだけ多数の青銅器資料を集めた図録は従来皆無である。長年にわたる苦心の蓄積といえよう。さらに多数の図版の配列について格段の配慮を払い、写真は5×5 cmの範囲を多く出ないように統一され、それに銘文のあるものはその拓本の写真を添えている。これらの資料を鼎にはじまる六〇種ほどの器種に分類し、しかもそれぞれの時代に分属させており、本文編の所論を一目瞭然たらしめている。もとより著者の研究には後日修正を行う点があろうかと思われるが、論旨は概ね妥当であり、その画期的な業績は青銅器研究、特にその編年研究に著しい進歩をもたらしたものである。

なお本書は三部作の第一部であり、時代として殷・西周を取扱っている。第二部として紋様に関する研究、第三部

として春秋・戦国時代の研究が予定されている。しかしこの第一部によってもっともすぐれた青銅器の出現した殷・西周時代が完結しており、独立した業績と考えることができよう。なお今後は以上の編年研究をふまえて銘文による歴史的事実の解明が望まれる。